

科目ナンバリング		U-LAS70 10001 SJ50					
授業科目名 <英訳>	ILASセミナー：「経済学の父」アダム・スミスの道徳哲学的な教えとは何か 『道徳感情論』の読解から ILAS Seminar :Moral philosophical Lessons from Adam Smith, the Father of Economics			担当者所属 職名・氏名	経済学研究科 准教授 竹澤 祐丈		
群	少人数群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	ゼミナール(対面授業科目)
開講年度・ 開講期	2026・前期	受講定員 (1回生定員)	10(10)人	配当学年	主として1回生	対象学生	全学向
曜時限	月5	教室	1共22		使用言語	日本語	
キーワード	思想史 / 経済学 / 社会哲学 / アダム・スミス / 啓蒙思想						
【授業の概要・目的】							
<p>この授業では、18世紀イギリス（厳密には、スコットランド）の思想家アダム・スミス（1723-1790）の人間や社会に関するものの見方がどのようなものかを、彼の主著『道徳感情論』を精読しながら味わい、私たちの人間理解や社会観について様々に議論することを目的にしています。</p> <p>みなさんが高校（や予備校）時代に、世界史や政治・経済、あるいは倫理を勉強したとき、アダム・スミスは、しばしば「経済学の父」と呼ばれていたと思います。このことは決して間違いではありませんが、スミスの経済学と呼ばれるものは、現代の経済学のイメージからは大きく異なります。むしろ現代人にとっては、総合的な人文社会科学というイメージに近い学問分野です。確かにスミスの『国富論』は、最初のほうは、現代のミクロ経済学のような議論（眠りを誘います：笑）が行われていますが、だんだんと、一国の経済発展の歴史や経済発展の条件などのマクロな議論に移っていきます。そして、この部分でも、一見すると歴史学や心理学の書籍と見間違えるような、（狭い意味での）経済活動や経済現象の分析を超えた内容が含まれています。</p> <p>このことから推測できるように、ある学問の中身や関連する学問分野との布置関係は、日に日に変化していることがわかります。学問的な変化が速く激しい自然科学だけでなく、一見、全く変わらないように見える人文社会科学も長い時間軸に置くと変化を遂げています。</p> <p>スミスに関するミステリーは、経済学の在り方の議論にとどまりません。スミスは、彼の生きた時代においては、経済学者ではなく、「道徳哲学者」として有名だったのです。しかも、なんとスミス自身も自分のことを「道徳哲学者」とみなしていたのです。</p> <p>現代人の多くにとって、「道徳哲学」という学問分野は、あまり聞いたことがないものと思いますので現代風に言い換えますと、人と社会に関する総合的な人文社会科学です。現代の学問分野名では、経済学、法学、政治学、社会学、心理学、歴史学などにかかわる分野ということです。スミスは自らの主著とみなす『道徳感情論』（『国富論』は重要な書籍とスミス自身も見なしていましたが、主著ではないのです）という書物の中で、人間はどのような存在であり、他者との関係はどのように形成されるのか、人間は他者をどこまで、あるいは、どのように理解するのかなどを詳細に議論しています。そこでのキーワードは、「共感（あるいは同感）sympathy」です。これは、人間の知的な能力であり、自分の利害得失にかかわらず、他者へ関心を抱く人間の傾向です。この能力・傾向によって、人間は他者と協力し、社会という名の集団を形成し、そのなかでの幸福を追求していく様子をスミスは議論しています。</p> <p>このような知的関心をスミスが持っていたことを踏まえると、数理化し人間があまり出てこないその後の経済学の歩みは、（経済学の）「父」のメッセージを裏切っていく過程という批判も、全く根拠のないものではないことがわかつてと思います。こうした自分の子供たちを自称する人々（後代の経済学者）の学問的な営みを、父スミスはどのように見るのかについて想像するのも面白いことです。</p>							
ILASセミナー：「経済学の父」アダム・スミスの道徳哲学的な教えとは何か 『道徳感情論』の読解から (2)へ続く							

さて、こうしたスミスの総合的な学問姿勢は、彼一人のものではなく、彼が日常的に議論をした人間集団である「スコットランド啓蒙思想」を担う人々の特徴でもありました。啓蒙思想とは、人間の能力を信じて、社会や個人の改善や改良を目指すような、18世紀後半から顕著になる「前向きな」思想で、有名なのは、フランス啓蒙思想やドイツ啓蒙思想です。スコットランドの啓蒙思想は、明治期の日本にも伝播し、福沢諭吉の議論などにも深い影響を与えたといわれています。

最近の高校の教科書では、スミスの『国富論』だけではなく、『道徳感情論』にも言及されることが多くなっていますので、(狭い意味での)経済学者らしからぬスミスのイメージは、みなさんにもある程度は共有されているかもしれません。しかし、この書籍そのものを読んだことがある人は、まだまだ少ないのではないのでしょうか。

そこでこの授業では、名前は知られつつも読まれることが少ない、スミスの『道徳感情論』を実際に紐解きながら、人間や社会について、あれこれと議論したいと思います。ここでは、学問が細分化することの意味や、総合的視点の有用性や必要性なども議論できればと思います。

人間観やあるべき社会の姿を論ずる場合は、ややもすると一定の解釈を共有している考え方一色になってしまうことがあります。しかしながら、異なる立場や異なる解釈にしっかりと耳を傾け、真摯な議論を行えるのであれば、どのような見解を持っている人でも大歓迎です。

以上のような目論見のもと、少人数の親密な空間で、楽しく、そして知的刺激にあふれた議論を行えるような工夫を担当者としてはしたいと思っていますし、参加する皆さんにも同じような配慮と努力をお願いできれば幸いです。

また精読が一区切りした時には、授業のテーマにかかわる映画やドキュメンタリーを視聴し、議論を深めたいと思います。

アダム・スミスのメッセージを現代人である私たちはどのように理解し、受け止めるべきかについて様々な関心のある皆さんの積極的な参加を楽しみにしています。

【到達目標】

この授業では、受講生がこれからの大学生活（やその後の社会生活）で必要な以下の基礎的能力を養うことを目的としています。

1. 【文献読解能力】人文社会科学の基礎的文献を読みこなす能力を身に着けること。
2. 【対話能力】他者の異論との接点を探りながら議論を進められるようになること。
3. 【説明能力】自分自身の意見や解釈を明快に提示できる能力と技術を身に着けること。
4. 【調査能力】ゼミでの主題に関して関連事項を的確に調査できるようになること。

【授業計画と内容】

授業の状況によっては、内容を変更するが、概略として以下のように進めます。

第一回：イントロダクションと参加者による自己紹介など

第二から六回：テキストに関する議論

第七回：関連するDVDの視聴とそれに関する議論や、特別教材を用いた議論

第八から十二回：テキストに関する議論

第十三回：関連するDVDの視聴とそれに関する議論や、特別教材を用いた議論

第十四回：残された論点に関する議論

第十五回：フィードバック

【履修要件】

1. WORDなどのワープロ・ソフトを利用して文書が作成できること（もしくは努力中）。
2. ネット環境を利用して検索などができること（もしくは努力中）。
3. 電子機器を用いたコミュニケーションができること（もしくは努力中）。

【成績評価の方法・観点】

ゼミナールへの9回以上の出席（この基準を満たさないと、レポートを提出しても単位認定されません）

討論への積極的参加と、議論の要点と論点をまとめたレジユメの担当（50%）

期末レポート（50%）

なお、とについては、到達目標の達成度に基づき評価します。またレポートの形式や課題に関するより詳しい情報は、授業において明示します。

【教科書】

アダム・スミス 『道徳感情論（日経BPクラシックス）』（日経BP、2014年）ISBN:9784822250003
（いくつかの翻訳が存在しますので、教科書に指定したものがどうかを十分に確認してください。）

【参考書等】

（参考書）

授業の中で議論の展開に応じて文献を例示します。

【授業外学修（予習・復習）等】

授業は文献の精読と議論が柱ですので、日常から、文献読解能力と対話能力とを鍛えるように心がけてください。

また毎回の授業で用いる素材（書籍の特定部分）については十分に咀嚼して、論点を事前に考えてきてほしいと思います。そして報告を分担する回には、当該書籍のまとめと論点やコメントなどを明確に記載したレジユメを作成してきてください。

【その他（オフィスアワー等）】

「暗記しては吐き出す」ような受験型の勉強から、「思考力を鍛える」ような学習スタイルへの移行が順調になされると、あるいは、「ひとりでがんばる」だけの孤独な勉強ではなく、「まず一人で考えてみて、その結果について他者と議論をしながら、また考える」という共同作業を含む思考様式を身につけると、みなさんの大学生活が、豊かに楽しくなるのではないのでしょうか。このきっかけが、本ゼミナールでの学習や人間関係によって得られることを願っています。所属学部の枠にとらわれずに、積極的に学ぶ気持ちを持つ新入生の参加を期待しています。

また質問や相談は、大歓迎です。会議などで不在の場合が多いので、電子メール（Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）で事前に予約することをお勧めします。授業の質問、進学相談、また就学上の問題まで、なんでも遠慮なく相談に来てください。わたしで対応できない問題は、該当する大学内の機関や担当者を紹介します。

【主要授業科目（学部・学科名）】